

2巻仕立ての「若宮祭礼之図」があり、南都奉行所与力であった橋本家から寄付で、制作に南都奉行所、ひいては幕府が関わった可能性も考えられる。

(提供 春日大社)

終わりに、本図帳の調査を行うにあたり、春日祭および春日若宮おん祭の諸行事に関する特徴や価値について、春日大社から多くの示唆および資料の提供を受けたことに深謝する。

京都班

文学部地理学科 實 清 隆

京都の世界遺産

京都は794年の遷都以来、1000年余の間、日本の「都」として君臨してきた。奈良と並んで国宝、特別史跡名勝などが多く、2000件を越える文化財・遺跡が存在する。「古都京都の文化財」は1993年10月に日本政府から世界遺産委員会に登録され、1994年12月に世界遺産委員会で登録された。

世界遺産に指定された建造物としては、飛鳥時代の「賀茂別雷神社」、奈良時代の「賀茂御祖神社」、「教王護国寺」、平安時代の「清水寺」、「延暦寺」、「醍醐寺」、「仁和寺」、「平等院」、「宇治上神社」、鎌倉時代「高山寺」、室町時代の「西芳寺」、「天竜寺」、「鹿苑寺」、「慈照寺」、「竜安寺」、桃山時代の「本願寺」、江戸時代の「二条城」の17資産がある。重要なのは世界遺産には指定されなかったが極めて価値の高い文化財・遺跡が数多くあることである。京都御所、桂離宮・修学院離宮は天皇家縁の資産という理由で外されたのを始め、数多くの文化財が「京都」一体に広く散らばっている。また、周辺の山・川・池を借景とした価値ある庭園・寺も多く、その意味で京都全体の町並みと自然景観の保全、「歴史環境」保全が重要な課題になる。

本年度の研究

京都の世界遺産に指定された建造物の保存については単に国宝・名勝だけではなく敷地全体もその「保存状態」が優れたものが選ばれている。さらに、その周辺地域についても世界遺産にふさわしいものでないと世界遺産に指定した意味が失われる。

実態としては、世界遺産周辺でも伝統的町並みが壊され、「環境」破壊が進行している。京都市では文化財保護課が中心となって世界遺産周辺にバッファゾーンを設けるなど「場を潰す」ような建て替えや新建造物、無秩序な開発を懸命に規制しようとしている。その結果、同課員の話では「指定されている寺社の権限が強い。それでも、最近、金閣寺、清水寺では周辺の土地を勝手にバッファゾーンを設け景観を守ろうとしている動きがある。」とのことであるが不十分であると言わざるを得ない。

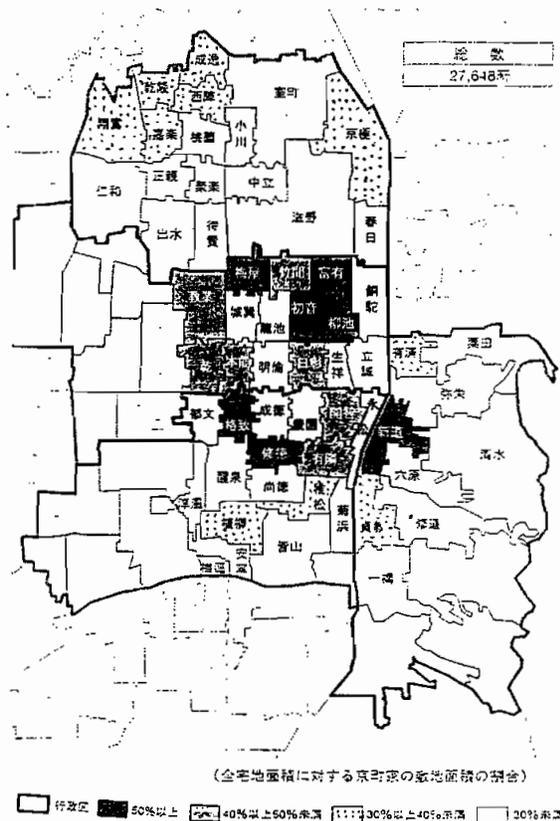
本研究では著者は、著者は直接、これらの指定された文化財そのものについての解析を行うのではなく、この文化財を生みだし、支えてきた民衆の「住空間・住まい・街並み」の動向に焦点を当て、世界遺産周辺の「京町家」の空間的配置と変容に重点をおいて考察する。

また、京都の世界遺産と文化財行政・保存と活用について、京都橘女子大の増淵徹教授に執筆の協力を依頼している。

京町家の現状と課題

京町家の最近の動向は1980年代後半からのバブル期以降、ドラスティックな破壊が行われ、町並みがコンクリートのマンションや駐車場などに変貌している。京都は1972年に全国初の「京都市市街地景観条例」を制定し、美観地区、特別保全修景地区を指定し、更に、1976年には「京都市伝統的建造物群保全地区条例」に基づき、産寧坂地区、祇園新橋地区、嵯峨鳥居本地区、上賀茂地区が指定された。

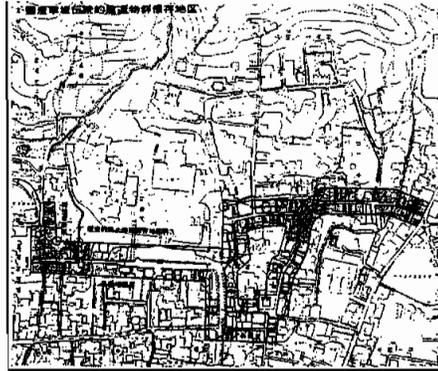
しかしながら、伝統的町並みの破壊の波は治まらず、京都市調査「京町再生プラン」によると、1978-98年の20年間に都心4区で戦前木造住宅が39%にまで減少し、残った木造住宅でも、「概観がすべて残っているのが僅か9%」という有様である（図1）。



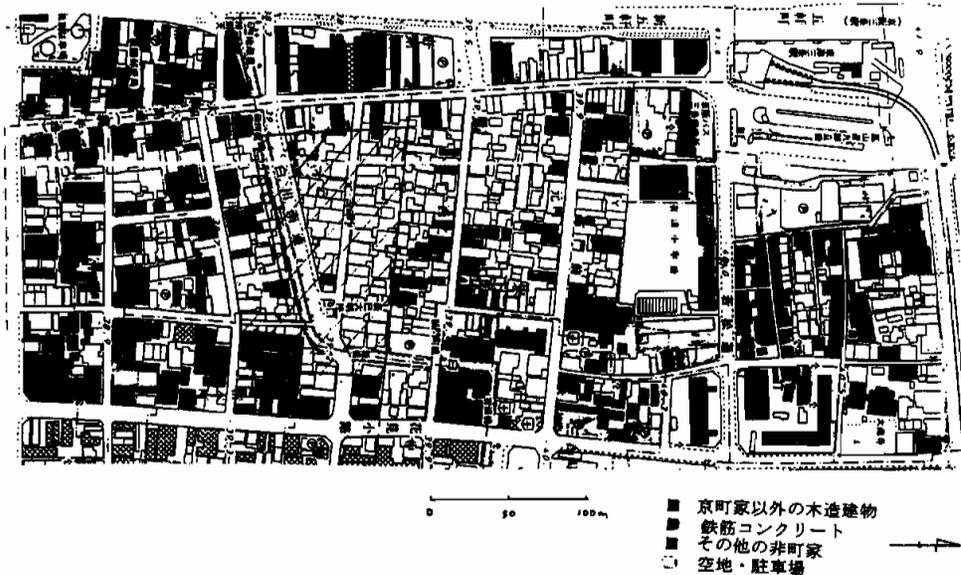
(図1) 元学区別京町家分布図
(全宅地面積に対する京町家の敷地面積の割合)

世界遺産に相応しい都市とは、それをつくり、育んだ京の町衆の町並みとその周りにおいてこそ生きてくる。著者は世界遺産周辺の歴史的環境を守るべく指定された「歴史的環境調整区域」の一つ「清水寺」周辺をフィールドにとり、町家の現状を調査した（図2、3）。

著者は「なら町」の町家の景観変容についても研究した（「国際観光都市奈良の景観とまちづくり—なら町の景観変容と環境保全—」奈良大学総合研究所報10、2002年発行）ことがあり、京町家と奈良町の町家の景観変容の比較をも試みた。



（図2）産寧坂伝統的建造群保存地区（京都市）



（図3）祇園新橋伝統的建造物群特別保存地区 京町家の分布